

教育の心とことばを 取り戻す

『教育』はこの9月号で800号を迎える。1951年11月の創刊号の特集は「日本教育の良心」であった。

「いじめ」問題があらためて顕在化している。大津市の中学生いじめ自殺事件に関するマスコミ報道に見られるように、子ども・親の願いを無視するような学校関係者の「心ない」対応がめだっている。学校現場に良心の発揮を許さない「教育への政治・社会の圧迫」はこのままでいいのか。同時にその圧迫に心を失うような「弱い教育主体」のままでいいのか。そこが問われている。

私たちは「教育を語ることば」を奪われたかのような状況に追い込まれている。「子ども」は少年法厳罰化の対象となり、「教師・教育実践・学校」は管理強化の的に、「学び・学力」は学力テストの評価対象に、「若者・労働・地域」は資本による収奪の対象に、また「教育改革」は権力的支配の強化を指すことばになっている。意味を奪われたことばの乱舞は、「何が真つ当で、何が不当か」を判断する人々の認識図式を破壊する。

本号は、教育実践と教育研究の深化を通じて、奪われた「教育のことば」の本来の意味を浮かび上げらせ、回復することをめざしている。それはいま教科研で作成中の「講座・教育学」全5巻のテーマに重なっている。「教育を語ることば」の復興は、教育にかかわる諸主体の側がその弱点を直視し、克服して、「心ある認識・判断力」を取り戻すのに必須だと考えるからである。本特集が、その一石になれば幸いである。